

職業能力の見える化が もたらすものは何か

+ 若者文化研究所 西村美東士

2023年2月11日 第2回CUDBAS研究大会

一般財団法人職業教育開発協会 VEDAC

若者文化研究所HP : <http://mito3.jp>

本発表の問題提起

1. 教育界や世論だけでなく、企業側さえもが、「シームレスなトランジション」（スムーズな移行）を教育に求めているが、問題はないのか。「個人の幸福と職業上での貢献」の両方につながる教育や生涯学習は、どうあればよいのか。
2. 新学力観による「学ぶ意欲」やコミュニケーション力、レジリエンス（精神的回復力）、VUCA、非認知能力への傾注などによって、見える化に逆行する傾向が見られる。

新学力観：①自ら学ぶ意欲と社会の変化に対応できる能力（思考力、判断力、表現力）の育成、②基礎的・基本的内容の徹底、③個性を生かす教育（1987年教育課程審議会答申）

ゆるい職場－自律的でパフォーマンス の高い若者ほど退職する

ゆるい職場

若者の不安の知られざる理由

古屋星斗

リクルートワークス研究所 主任研究員

781

中公新書ラクレ

職場が「ゆる」くて、辞めたくなる～リクルートワークス研究所

「働きやすい会社」を、なぜ若者は辞めてしまうのか？

新時代の、若者・仕事・日本社会を紐解く――

「一度も叱られたことがない」「ここにいても、成長できるのか」

「学生時代と変わらない」

「今の職場、“ゆるい”んです」。そんな不安をこぼす若者たちがいる。

2010年代後半から進んだ職場運営法改革により、日本企業の労働環境は

「働きやすい」ものへと変わりつつある。しかし一方で、若手社員の

離職率はむしろ上がっており、当の若者たちからは、不安の声が

聞かれるようになった――。本書では、企業や日本社会が抱えるこの課題
と解決策について、データと実例を示しながら解説する。

●第一章 注目すべきは「若者のゆるさ」ではなく「ゆるい職場」

1 若者の早期離職状況

日本の若者就労の特徴／3割の退職者／大手企業だけが上がっている

「育休世代」のジレンマー女性活用はなぜ失敗するのか？

中野氏は、1999年の改正均等法以降入社の上帝大出の一流企業総合職女子を中心に、15人のエリート女子の育休取得後の挫折を追う。彼女たちは、男並みに仕事で自己実現すること(バリキャリ)と、早めに出産して子育てするという「産め働け育てるプレッシャー」のジレンマに陥るという。「生きづらい」などと口走れば、他の女子から「あの人たちは勝ち組だから」と距離を置かれる。育休明けに復職しても、周りから「配慮され」、バリキャリの時のようには働かせてもらえない。彼女たちは、子にはお受験をさせない。自らは高い学業と社会的地位を達成しながらも、今となっては喜べないでいるのだ。

エリートの割には、妊娠時期については無計画で、また、結婚前に家事分担について相手と話し合いもしていない。同類婚といって、自分と同等以上の時間のない相手を選ぶが、海外出張に飛び回る夫をずるいと思ってしまう。そもそも就活中も、やりがい重視のため、復帰に不都合な職場を選んでしまっている。

西村美東士書評

中野円佳

「育休世代」のジレンマ
女性活用はなぜ失敗するのか？



光文社新書

713

進路格差 <つまずく生徒>の困難

『進路格差 <つまずく生徒>の困難と支援に向き合う』

生徒と保護者を食い物にする「教育困難大学」と「ブラック専門学校」、旧態依然とした「高校生の就活」の慣例…。さまざまな針路問題を指摘し、教育と労働のあり方を問い、戸惑う高校生と支援する人々の姿を描く。

無償化の落とし穴

分極化する進学と就職???

生徒支援の立場から、教育と労働を問う

「夢追い型」の大学・専門学校に進学して貧困スパイラルを断てない実態や、「一人一社制」「在学中の研修禁止」といった理不尽な慣例がある高校生の就活、煩雑すぎる給付型奨学金制度…。

「教育困難大学」・・・「先生、おれら勉強、できないからさ」学力面を聞くと、「基本的にはあまり変わらない気がするのですが」と言った。その上で、「この学校に勤務した最初の年、ある授業でいかにもヤンキー風の学生に言われたことを覚えています。『先生、おれら勉強、できないからさ。そこんところわかってもらって、適当にやってよ』と言われたんです。驚きましたよ」と話してくれた。

進路格差

<つまずく生徒>の困難と支援に向き合う

朝比奈なを
Asahina Nao

止まらぬ負の連鎖…

今、高校生に何が起きているのか？

生徒と保護者を食い物にする
「教育困難大学」と「ブラック専門学校」、
旧態依然とした「高校生の就活」の慣例…。
“18歳の選択”にのしかかる多くの問題を提起する。

鋭い教育ジャーナリストが
現場から渾身のレポート！

朝日新書
定価：935円（本体850円＋税10%）

トランジションは学校にとっても企業にとっても「よそごと」



関心事は「出口だけ」の大学？

山本繁『つまずかない大学選びのルール』ディスカヴァー・トゥエンティワン、2013年02月

山本氏は、高等教育と社会教育の革新のために活動するNPO法人の理事長。「入学してから就職後3年間までストレートに進めるのは全体の約3割」という状況のなか、「面倒見のよい大学→本当は中退率30%」、「就職に強い大学→実際に就職できるのは学生の50%」、「思いやりの心を持った学生を育てる大学→地域の人たちからの評判が芳しくない」と注意を喚起する。

氏は問いかける。パンフレットやWEBサイトでは、大学のコンセプトだけでなく、これを達成するための方法と効果の証拠が提示されているか。多忙な著名人教員では受講回数も制限されてしまうので、それより、一般の教員が教授法等を改善する訓練（FD）に取り組んでいるか。じつは、FDを嫌う教員も多い。大学の中身をこのように鋭くえぐる視点をこの本は提示する。

西村美東土書評

ヤンキーならいいのか？

コミュニケーションも、お笑い芸人のように達者で、
自信をもって生きているが・・・。

ヤンキー化する日本

斎藤 環

角川Oneテーマ21

ヤンキーとは米国人の俗称で、戦後は、米国の若者の風俗をまねる「不良青少年」を指していた。そのため、以前は、学校を荒らす「敵」だった。しかし、思春期・青年期の精神病理学を専門とする斎藤氏は、今の「ヤンキー」について、「高尚な芸術」に対するバッドセンス、「気合い」や「絆」といった理念のもと、家族や仲間を大切にするという一種の倫理観が融合したひとつの文化であると述べる。コミュニケーションも、お笑い芸人のように達者で、自信をもって生きている。そして、「誰の心にもヤンキーはいる」とし、現代は、ヤンキー文化のエッセンスが広く拡散した時代であり、むしろ自明すぎて見えなくなっていると指摘する。

著者は理屈をこねていてもしょうがない」、「とにかく真心と誠実さで当たっていけば人は変わる」、そして「理論は熱の前に敗れ去る」という前提を批判する。しかし、非行はともかくヤンキー性は更生させる必要はないという。ヤンキーを突き詰めていくと、絆や協調性に傾き、まとまりをつくるのに役立つと言う。同時に、「公共」概念とセットで「個人主義」を再インストールするよう提言する。→個人化と社会化の停滞？

西村美東士書評

「自己肯定感」 信仰の害

トランジションにおいては、「オンリーワン→自己肯定感」という発想に無理があるのではないか。

高学力の若者・・・ゆがんだ自己肯定感の挫折

「ヤンキー」・・・根拠のない自己肯定感

そして、「自己肯定感」をもてない若者たち

ほとんどの若者が、本当は、職業において「有能」でありたいと思っているのではないか。

自己相対視トレーニングの結果から

根拠のない自己肯定感を追い求めるより、可能性を含めた根拠のある「有能感」を

能力構造とラダーの効果

「有能」の内実と展望を「見える化」する

結論 大会プログラム講演要旨集より

「ひきこもりの若者」も「就活中の大学生」も、職業人像が当然ながらぼんやりしていて、なおかつ、やや「無能感」に陥りつつも、主観的には「きちんと働きたい」と思っていることがわかった。ここで、（それほど無理のない）職業人像と必要能力がもっと「見える化」されれば、安心して、かつ主体的に職業に向かうことができるのではないか。このような意味で、職業能力の見える化がもたらす成果には、大きいものがあると考ええる。

クドバスによって、若者に対して精神論ではなく、職業人の具体的な姿を示したい。それが「社会の中でこそ、個人としてより充実して生きる」ということにつながると考える。